

子供の想像

文學士 倉橋惣三氏談

今回私も當フレーベル會々員の一人に加へて頂
きまして、皆様と共に幼児の爲に盡し又研究する
ことの出来ましますのを仕合に存じます。幼稚園のこ
とはフレーベル以來既に久しき年月を経ましたが
今日なほ研究すべき問題が澤山残つて居ります。
然るに一方には既に幼稚園のことに反對して、其
の不必要論を稱へる人もある様であります。私共
はいよゝゝ此の問題の爲に大に研究をしなければ
なりません。

そこで今日幼稚園教育の根本問題は何であるかと
申しますると、随分いろいろの重要問題が澤山あ
りますが、私は之れを二つに分けて、教育制度上
の問題と保育法上の問題とに成ると思ひます。而
して制度上の問題としては一般教育上に於ける幼
稚園保育の意義を明かにすることゝ、從つて現に
色々議論のあります處の幼稚園の社會的職能

を明かにすることが急務であります。次に保育法
上の問題としては、フレーベルの考へは實に立派
なものであります。が、時代を経た今日の心理學及
教育學を基礎として、考へれば、更めもし、補ひも
する必要のある個所も少くありません。即ちフ
レーベルの理想を今日の進歩した學理を以て如何
に完備のものたらしめるかといふ研究が必要と思
ふのであります。而して此の兩問題の兩方に就て
考へることは、餘り多くの時間を要しますので、
今日は第二の、即ち保育上の問題殊に其の心理學
的基礎のお話だけに限らうと思ひます。
私は幼稚園保育の教育心理的基礎は兒童の想像と
疲労との二問題の研究を最も重要なことゝ考へて
居ります。分けても幼児の疲労に關する充分の智
識を基礎としない保育は非常に危険なものであり
ます。近來幼稚園教育に反對する議論の中で、衛
生的方面の論は別として、教育的方面からの反對
論の中心は實は此の疲労問題に歸すると言ふてよ
いのであります。之れはいづれの教育に於ても大
切のことでありますが、幼稚園期に於ては殊に重

要の問題であります。私共は何事でもつい自分を尺度にして物を考へる傾向がありますが、教育の實際が被教育者たる兒童の尺度を顧慮せねばならぬことは申す迄ありません。そうでないと吾々が所謂熱心なればなるだけ、兒童を害する様な妙な結果があらはれます。心身發達のまだ弱い幼兒に對しては、殊に此の心配が大であります。處が之れは重要な點に於ては最も大であります。併し之れはいはゞ保育上の注意の消極的方面であつて、私共の手綱をひかへる方の注意であります。が、保育の積極的注意、即ち進んで幼兒の精神の發達を誘導するといふ側では、兒童の想像作用を明かにすることが第一の要訣であります。疲勞問題のことは他日の機に譲つて、今日は主に此の想像作用の方面のことを考へ度く思ひます。

想像作用は人間の精神中の一部の作用の如く考へる人もあるかも知れませんが、實は精神全體の働きであります。殊に幼兒に於ては、是れが著しいのであります。彼等の精神活動の殆んど一切が想像作用としてあらはれるといつてもよい位であ

ります。而して想像の作用は、心理學上之れを二つに分けて、一つは自然に吾々の精神に生ずる自發的想像作用、一つは有意的に起る構造的想像作用であります。大體に就て申しますると、吾々成人の想像は主に後者でありまして、普通に美術家や詩人小説家等のことを想像に豊んだ人といふのは、つまり構造的想像作用のことです。處が吾々自分がさうである爲に、子供の想像といふ時にも往々にして構想的の如く解し易いのであります。が幼兒の想像は、實は自發的想像の方が多いのであります。殊に極く幼い子供ではまだ有意的精神活動力が極めて稀で、殆んど皆自發的想像であります。而して、想像の發達上、此の主として自發的想像の時期から次第に構想像へ進んでゆく、其の過渡の時期、遷移の時期が、即ち丁度四歳から六七才頃の幼稚園時期に相當するのであります。想像發達の研究として心理學上最も興味のある時期なのであります。

幼兒の想像の表出の第一は遊戯であります。兒童の遊戯は御承知の如く、兒童の精神生活全體の表

出でありますから、特に想像に限つたことではありませんが、遊戯の通有性として想像は主なる部分を占めて居ります。構成想像も勿論ありますが自發的想像も最盛に行はれます。所謂遊戯の幻覺と申すのが即ち之れであります。一般に何々ごつこと名のつく遊び、殊に人形遊びに於て之れが著しくあらはれます。茲に人形遊びと申すのは極く廣い意味で申すので、必ずしも人の形には限らない、無生の玩具を生けるものとして取扱ひ遊ぶのは、一方に生けるものではないといふことを知つて居ながら、尙生けるもの、如く思ふといふ所に、即ち遊戯の幻覺が起つて居るので、自發的想像に他ならないのであります。此の他、花にせよ、石ころにせよ、殆んどあらゆる自然物に生命を附與するといふ兒童の豊富なる自發的想像力は誰れもよく知る處であります。而して之れ等の自發的想像力と同じ様なのが詩人の構成的想像力に行はれて居る譯であります。

次は遊戯の如く外からは分りにくいことではありますが、外國で「畫の夢」と稱して居る處の現象があ

ります。成人でも時々將來の空想をして、いろいろ當にもならぬ、ありもしないさき／＼のことなどを考へることがありますが、幼兒の精神内には之れに類することが多く行はれて居ります。只年齢により其の内容には異なる處がありますが其の空想の量に於て、度に於ては兒童の方が成人より勝つて居ります。之れはスミスなどの研究によつてよく分つたことでありまして、健全な兒童にも常に存する普通の現象であります。

次に、兒童の想像性の尙著しい例は、「想像上のお友達」といふ現象であります。即ち現實にはありもしないお友達が想像の産物として出來て、兒童は之れと交り談話するのであります。之れは前に申した「畫の夢」の度が強くなつて、いはば空想の凝固體としてあらはるゝこともあるし、又單獨に普通の想像的所産であることがあります。此の事についてはいろいろ記載がありますが、丁度最近の米國教育雜誌にスウェットといふ人が珍らしい例を發表して居ますので、それを御紹介し、勞々兒童の「想像のお友達」の本質をお話すること

にしよう。
 其の子供は女兒でありますが、凡そ三年八ヶ月の頃から此のお友達が出来て、初めは自分の名をつけて〇と呼んで居ましたが後には「私の嬢や」(My Miss)と呼ぶ様になりました。丁度三歳十ヶ月の時、此の兒は獨りで床の上へ座して、獨言のやうなことをいつて居ました。皆んな、いけない兒なのよ。Bさんも、Aちゃんもいけないの」と言つて居ますので、誰れとお話してゐるのか尋ねましたら「私の嬢や」と答へました。此時から此の稱呼が始まつたのであります。それから、三週間程経て後のこと、此の兒は斯ういふことを言ひました。「私の嬢や」がお家を出て往來へ出たがるから縛つて置きましょうと。即ち大に客觀的關係をあらはすと共に、道德的態度が出て居るのであります。そして此の道德的態度は、次には「嬢や」の方から子供を叱るといふことになりました。即ち丁度満四歳になる二週間程前のことでした。食事の時何かお行儀の悪いことがあつて、次の室へ獨りで座らされて居ると、急に泣き出した。お母さん

二二
 が行つてどうしたのかと聞いて見ると、「私の嬢や」が出て来て私の足を叩くのですと答へた。又満四歳になる三日前のこと、食卓について居て其の子供が急に泣き出した。何故かと尋ねて見ると「私の嬢や」が椅子から引づり落そうとするのだといひます。それから段々調べて見ましたら、子供が自分で頂いたパンを食べて仕舞つて、テーブルの上の他のパンをも取ろうとした。手が届かないからテーブルへ乗りかゝる様にして取ろうと思つたすると、其の刹那例の「嬢や」があらはれて、ぐんぐん足をひつばつたといふのであります。即ち所謂良心の責苦に他ならなかつたのであります。其の他いろいろのことがあつて、五歳の頃からは「嬢や」のあらはるゝことが極く稀になりました。而して、此の女兒は身體も精神も健康な普通兒童でありますから、此の現象も病的現象では決してないのであります。只多少珍らしい著しい例ではあります。殊に特異な現象ではないのであります。以上述べましたのは、即ち兒童の自發的想像界の

状態であり、次に之れが段々發達して純構成的想像の時期に至る間に、過渡期として、半自發的、半構成的想像の状態があります。

即ち幼稚園時期の頃になると、子供の心に聯想的作用が盛に起つて來ます。しかも其の聯想は成人の場合と違つて非常に粗奔なものである爲に、聯想といふよりも想像といつた方が、い様な状態に富んで居ります。其の想像的聯想を二種に分けて無生物の運動を生物の運動へ聯想すること、無生物間互の類似點から聯想することとに見ることが出來ます。而して、その前者は前に申しました通り、假令ば人形遊び等に於てあらはる、遊戲的幻覺と同じ様のことですが、そこへ多少の構成的要素が混じて來るのであります。花に水をかけてやるのに「花が喉がかわいでるでしょうねえ」といふとか、風に揺いでる樹の前へ行つて自分もお辭儀をするとか、月の周圍に星の澤山出てるのを見て、お母さんが多勢の子供をつれて散歩して居る處だといふ如き。即ち一寸見ますと如何にも詩人の構想に成るものと同じですが、兒童に於ては

其の構想と自發的想像との中間の状態に居るのであります。次に無生物間の聯想といふのは、丸ポヤのランプを見てお月様だといふとか雨樋の水を川だといふ類、即ち吾々成人の智識で見れば其の類似點以外に相違點も多く見えて、其の間におのづからの聯想が起るといふ如きことはない（強い譬喩をとればとりますが）のですけれど、兒童の粗奔な觀念界では其の類似點だけに著しい聯想が結びついて、雨樋を川といひ、丸ポヤを月といふに些の不思議をも無理をも感じないのであります。即ち換言すれば半構成的半自發的に想像が起るのであります。幼稚園の幼兒が毎日遊んで居る中には此の種の例となることはいくらでもあるものであります。

而して其の次に成ると想像に構成的性質が次第に増して來て、兒童の工夫といふものがいろいろ行はれて參ります。幼稚園の特技なるものゝ大部分は即ち之れであります。豆細工、板ならべ、積木、粘土細工、皆此の構成的想像によつて營まるゝものであります。之亦皆様の毎日御覽になつて御承

知ること、詳しく申上げる迄もありません。以上、児童の想像性の状態及發達の段階に就て、ざつと申上げたのでありますが、然らば、想像性の教育的注意は如何なる點にあるかといふことを次に少し考へて見たいと思ひます。昔から教育者の間には児童の想像性に就て二様の考へを懷いて居る人があります。一方の考へは想像性は正確なる智性の發達を阻碍することが多いから、つめて禁止した方がよいといふ説。一方の人々は之れに反對に想像性をどこ迄も利用し、また養つて行かうといふ説であります。勿論實際上に於て、そう極端に一方に偏するといふことは、何にしてもし注意深い教育家にある筈はないのですが、其の思想に於て此の兩説は歴史上分れて居たやうであります。處で適當の處は、どうしたらよいかと申すと、私は想像性の誘導を——少くも幼稚園時期に於ては、最も必要のことと思ふのであります。但し児童の想像性を過度に擡にせしめた爲に、種々憂ふべき結果を生ずることはあります。フェレルの書いて居ます例の様に、子供の時から空想

癖が成人になつても愈々當じて來て、實際社會の現實的生活に少なからぬ障礙を蒙つて居る人はあるのであります。殊に病的空想家に陥るの心配もあるのであります。之れは大に性意を要すべきことであります。此の弊を以て直に児童の本性たる想像性を斥けることの誤りは申すまでもない。一體想像といふ言葉そのものが一概にたわいなもの、意味に考へられて居るのであります。之れは想像と空想とを混じて考へる結果で、少くも構成的想像が決してたわいなものでないことは勿論であるのみならず、心理的に想像の發達を辿り、其の本質を分解して見ると、構成的想像の先驅者たる自發的想像も亦、徒に空なものではありません。想像の働きを分解すれば、其の想像力と想像の材料とになります。而して其材料如何によつて想像の形式又種類は違ひますが、それは實は他の精神内容に伴ふことで、想像力そのものとは別であります。で、吾々成人では其材料は立派なもので又豊富であります。其動力たる想像力の強さは子供の方が却つて大きい。従つて想像の産

物たる結果は成人の方が立派ですが、想像生活の活潑に激刺たることは子供に劣るといふことになりるのであります。そこで子供の想像がたわいのないのは其の材料となる觀念の貧弱によるのであります。すから、想像性の教育は、如何にしてその材料を供するかといふこと、如何にして其の想像力を適當に導きてゆくかといふことになります。而してその想像力が適當に發達し、その材料が豊かに且つ整頓されてゆく處に、いろ／＼の子供の發明が出来るのであります。發明といへば、如何にも大したことの様に聞えますが、兒童は始終發明をして居るのであります。吾々成人から見れば、つまらない何でもないことが、子供にとつては中々大發明であります。殊に教育上からいへば、發明の結果よりも其の經路に價值があるので、而して、その發明の徑路なるものが即ち想像力の作用によるのであります。幼稚園で兒童によつて行はるゝ色々なことが、皆この大いなる價值を有して居るのであります。

之れは主として智性の方から想像の價值を述べた

のですが、尙又、之れに隨伴する感情の養成の方面に於て大いなる効果があることも忘れてはなりません。即ち想像は觀念からいへば多少の誤りを含むことが多いのですけれど、其れから生ずる、子供心に經驗する種々の情緒なるものは皆眞實であります。殊に想像の出來てゆく要素の中では感情が主なる位置を占めることが多いのであります。から、ある感情によつてある想像が生じ、それによつて又ある感情が起る次第であります。即ち感情は想像に二重の要素となつて居るのであります。兒童の想像を斥け阻碍することが、此の大切な感情の養成に害のあることは明かなのであります。即ち私は兒童教育上、想像性の教育の重要なことを主張したい一人であります。殊に前に申した如く、幼稚園期は兒童に於ける二種の想像の選りかはりの時期でありますから、其の點に於て想像の研究を幼稚園教育の心理的基礎の一つと考へるのであります。處が更に進んで實際上の注意となると種々のこまかいことが起つて參りますが、其の一つとして考へ度いことは想像性を養成すると

いふ處から、餘りに之れを刺激し過ぎたり、又は年齢不相應な想像を要求したりして、「想像の早熟」に陥らしむる様のこととは、最も注意を要すること、思ひます。詳言すれば、前に申した如く成人と子供とは、其の材料の差によつて想像の性質が違ふのでありますから、同じ想像と雖も、成人の想像をそのまゝ與へることは往々注意を要するのであります。即ち假令はお伽噺等に於きましても、其の内容性質の種類を子供の想像に適したものにすることが大切であります。同じ想像の産物だと申しても、成人の想像なり、又野蠻人の想像なりによつて出来たものが、どこ迄子供に適當するかといふことは、慎重な検査を要することであります。成る程、神話傳説等の多くは幼稚なる人文の産物で、子供の想像に餘程類しては居りませんが、其の文學上の價值、乃至詩的興味は別として純教育的に直に兒童の想像性養成の資料として委く適切なり否やは、更めて考へねばならぬこととあります。尤も之れは只一例に申したので、此事に就てのみならず、幼兒の想像性の養成には深い

注意を要することが随分あると思ふのであります。而してその基礎は子供の想像そのものの性質及發達に就ての研究によらねばならぬこと、申す迄もありません。お互に愈々此點の研究を進め度いと思ふのであります。いろ／＼お話が煩雜になりまして御清聴をけがしました。

●澤村博士發明の食物防腐器

農科大學教

澤村農學博士が今度發明して自家用に供し居らる、簡易食物防腐器は中籠ある銅製圓筒にして上端の周縁に溝あり蓋の頂上に小孔あり其下部の端は圓筒の溝に箝まる之を用ふるに圓筒の底に少量の水を入れ食物を皿に入れて中籠に置き蓋の小孔に綿栓を施して之を箝め圓筒を七輪若くは火鉢に掛けて熱する時は蒸氣に依りて食物は殺菌せらる而して蒸氣は蓋に觸れ短縮して水となり淺中に流れ入りて間隙を塞ぐを以て筒内の食物は數日間腐敗することなし製費も至つて廉價銅製にて一圓位の由